





## 1. アハバールフロムヨルダン 《代表からの挨拶》

### (1) 代表からの挨拶

サダーカ代表 田村 雅文



「二度と踊ることはできない」と言いながらサダーカ代表をはやし立てる負傷者たち（アンマン市内のローマ劇場でシリア人を招待したイベント）

3月から5月にかけて多くの方々がサダーカを通じてヨルダン都市部に住むシリア人難民を訪問してくれました。実際の状況を自分の目で見て伝えるという地道な作業が、紛争のもたらす様々な影響を世界へ知らせ、支援の限界に皆が気づき、更には難民問題の根本的な解決となる紛争停止のきっかけ作りになればという願いを込めながら、現地において出来る事を行ってきています。

5月にサダーカを通してヨルダンを訪ねてくれた友人で看護師の田村佳子さんが JIM-NET（日本イラク医療支援ネットワーク）の業務（アンマンを始め、イルビドやラムサといったヨルダンの北の街の負傷者の家やリハビリセンター、その交通手段等を支援）の傍ら、サダーカが支援を続ける東アンマン地域の訪問看護を行い、特に医療的観点から様々な助言をしてくれました。最後の日の夜、彼女が静かにつぶやいた一言が心に響きました・・・。

**まささん、やっぱり戦争は止めなきゃいけない。**

あまりに多くの怪我人が今も毎日シリアからヨルダンへ運び込まれます。手術を受けて手足を失った様々な年齢層の男女がリハビリ施設に通っています。手術後リハビリのことなど知らずに家にいた為に、まったく手足が動かなくなってしまった人にも会いました。田村佳子さんは、イルビドの北部のシリア国境付近に住む協力者の家に一晩泊り、シリア国境の向こうに爆弾が落ち、煙が舞い上がる様子を目の当たりにしたと言います。負傷者を支援しても目の前でまた怪我人が増えていく、まさにザルに水を灌ぐような支援への空しさと限界・・・。そんな中で出た彼女の一言。

**やっぱり戦争は止めなきゃいけない。**

2014年6月に入っても、紛争の収まる気配は無く、むしろ、より混沌とした状況が続き、既に混乱前は2000万人だった人口の内900万人が家を失い、250万人が国を去ったと言います。とはいえ、ヨルダンでの難民生活は経済的に高くつくにも関わらず、収入源がないために、シリア国内のなるべく安全な場所へ帰る人も多くいます。



家庭訪問先で 左が田村佳子さん

戦争を止めるためにできること。サダーカはこの地域で起こること、戦争がもたらすもの、支援の限界を伝える多くの人たちを繋げ、紛争を止める「きっかけ」が折り重なり大きなうねりになるよう、これからも活動を続けていきたいと



思います。

## (2) シリア難民のホスピタリティ

神戸大学大学院博士後期課程・シリア支援団体サダーカ広報担当：井上慶子

5月の上旬に一週間ほど、ヨルダンを訪れ、ヨルダンに滞在する都市型のシリア難民の家庭訪問をはじめ、シリア難民支援を行う個人の活動のインタビュー同行などを行いました。その間、シリア難民の家庭にホームステイをさせていただくことができました。

私がシリアを訪れたのは2007年12月クリスマス前から翌2008年1月はじめの2週間です。首都のダマスカスをはじめ、アレppoなどの地方都市や郊外の農村にも訪れ、どこにいてもシリアという国の温かいホスピタリティを感じたことを今でも強く印象に残っています。彼らからしてみれば、私は見知らぬ国の見知らぬ人です。ですが、彼らは私を見かけると、まるで古くからの友人に対するように「シャーイ(お茶)を飲んでいけ」と声をかけてくれ、甘い温かいシャーイを淹れてくれるのです。今回のヨルダン滞在中も、その彼らのホスピタリティは彼ら自身がどんなに過酷で辛い状態にあっても変わることはなく、いわゆる“他者”である私を受け入れてくれました。お世話になったシリア難民のお宅では、毎日これでもかという量の美味しいシリア料理を振舞ってくれました。「これらの香辛料はシリアから持ってきたの」「これは私が作ったものよ」ホストマザーは、限られている食材をたっぷり使って、毎日美味しい料理を作ってくれ、友人に会うと言えばお土産にと持たせてくれたりしました。



家庭訪問の際にいただいたアラビックコーヒー(2014年5月筆者撮影)

シリア難民の家庭訪問に行ったときも、彼らの温かいおもてなしを受けることがありました。彼らの多くは難民申請をし、UNHCRなどから様々な支援を受けていますが、それらは決して十分でなく、彼らの生活は苦しい状況にあります。それに関わらず、こちらがどんなに断っても、彼らは温かいシャーイやアラビックコーヒーを淹れてくれ、ときにはシリアのお菓子だと言ってお茶請けまで出してくれました。そして、「今日は来てくれてありがとう」「話を聞いてくれてありがとう」と言います。

ホームステイ先には男の子がひとりいました。ある夜、私は友人たちと夕食を食べてから帰ると伝えそうなのですが、家に帰るとホストマザーが、息子がどうしても私とご飯を食べたいと言ってまだ食べていないと言うのです。すでに夜11時。まだ会って数日なのにまるで家族のように受け入れてくれていたことを強く感じたときでした。「遅くなってごめんね。一緒にご飯食べよう」と布団にくるまる彼に声をかけると、満面の笑みで布団から出てきました。



ホームステイ先のマザーが滞在最終日にとびきりの

シリア家庭料理を用意してくれた

(2014年5月筆者撮影)

シリアの人々はお客を友人、ときには家族のように迎えます。これはほかのアラブの国でも見られることですが、わたしはシリアの人々のホスピタリティは特に温かく強く感じます。

今回お話を聞いたシリア難民の多くは、早くシリアに帰りたいと話す一方で、それがすごく難しいことを、もしくは叶わないのではないかということも分かっている印象を受けました。「シリアに帰って、またみんなで仲良く暮らしたい」「国



籍関係なく世界が仲良く暮らせればいい」「シリアに戻ったら私たちの家に遊びにきて」という言葉を聞いたたびに、どんなに辛く苦しい状況にいても、他者を受け入れる温かいホスピタリティを彼らから感じました。むしろそれは、そういう過酷な環境にあるからこそ強く表現されているような気さえます。そのような彼らが一刻も早く安心な暮らしができるよう、自分は何ができるか、思考し行動していかなければと改めて決意した一週間となりました。

### (3) ヨルダンのシリア難民の現状を目の当たりにして

日本学術振興会／立命館大学：今井 静

2014年2月後半にヨルダン政府のシリア難民受入政策についての関係者への聞き取り調査や資料収集のためにアンマンを訪れ、その際にサダーカ代表の田村さんのご協力で家庭訪問に同行させていただくことができました。その際に受けた印象などを、ということで書かせていただきますが、その前に支援の現場であるヨルダンという国と難民との関わりについても少しだけ触れておきたいと思います。

私は現在、シリア難民流入という形でもたらされた域内情勢の変化の影響が、ヨルダンの政治・社会・経済に対してどのように作用しているのか、といった点に関心をもって研究を進めています。ヨルダンでは、現在 UNHCR に登録しているシリア難民が約60万人居住しています。さらに、統計的に把握することが難しい登録外の人々もかなりの規模で入国していると考えられることから、ヨルダンのシリア人コミュニティはヨルダン人口の1割以上を占める大きなものとなっています。ヨルダンは、1948年と67年のパレスチナ難民の流入や2003年のイラク戦争による難民流入など、シリア難民発生以前にも何度も大規模難民の受入を経験してきました。しかしながら、これらの難民受け入れは必ずしも人道的見地に基づいて積極的に行われているものではなく、周辺諸国の政治情勢の影響が国内政治を左右するという小国ゆえの弱さのために、大規模難民発生という事態の前になす術なく甘んじて現状を受け入れざるを得ないという側面が大きくなっています。そのため、難民受け入れに際してはヨルダン政府による一貫性のある政策や強力なイニシアティブが取られているとは言い難い状況であり、今般のシリア難民の保護についても、政府と UNHCR を中心とした保護業務を国内外の NGO などが補うという形が取られています。さらに、中東にありながら天然資源に恵まれず目立った産業も持たないヨルダンにおいては、難民受入のためには通常の財政援助に加えて国際社会からの経済援助の獲得が不可欠となっています。

このように、難民問題を俯瞰する中では、ヨルダンで避難生活を送っている難民の方々が抱える個別の事情というものにあえて目をつぶらなければならない場面も出てきます。今回はわずかに五つほどのご家庭に伺ったのみではありましたが、難民となる前のシリアでの暮らしや、アンマンにたどり着くまでの経緯、家族構成や収入の有無など、多くの要素が人の数だけ異なる避難生活を作り出していました。最低限の家具を備えた部屋で、なんとか以前の暮らしを取り戻そうとする人々もいれば、部屋の中にあるのは毛布のみ、という状況の中で途方に暮れて難民キャンプへの逆戻りを検討する人々もいました。一方で、どの家庭においても珍しい外国人の訪問者である私たちに興味を示してくれる子供たちとの触れ合いや、彼らを見守りその将来を案じる家族の姿がありました。学校で習った英語で得意げに数を数えてくれる子や、私たちの持ち物に興味津々の子。次の学期には学校に通える子供を増やしたいと話す親に、収入がない中でなんとか子供の教育のための費用をねん出しようとする親。



カメラに興味津々の子どもたち  
(家庭訪問先にて)



紛争に巻き込まれながらも懸命に生きる人々もまた、大切な人を思いやり、より良い生活を求めているのであり、その姿は全く異なる環境で生きる他の誰とも変わらないものです。紛争や難民について多くを一度に理解することが難しく感じられたとしても、このような身近な姿を思い浮かべることによって、彼らを取り巻く状況の改善のための働きかけにより多くの方に携わっていただければ、と強く思います。

#### (4) シリア難民との触れ合いを通じて感じた、国際協力のあり方

学生団体 S. A. L. / 東京医療保健大学 3 年 今関 亜矢乃

私は、国際問題を発信する学生団体 S. A. L. に所属しています。活動の一環としてスタディーツアーというものがあり、自身が興味のある国に 8 人前後で 2～3 週間行き、NGO 等を訪問しながらその国の本当の姿に近づこうというのですが、私はそのスタディーツアーで 2013 夏と 2014 春にヨルダンを訪問しました。

2013 年の夏に訪れたとき、ヨルダン人のガイドさんが日本から来た私たちに様々なヨルダンを見せてくれました。観光地だけではなく、ヨルダンの家庭料理やアラブ人の文化を教わったり、大学を訪問したり、国境線を見るなどたくさんの経験をさせて貰いました。その中で、隣国シリアからの難民が滞在するヨルダン北部にあるザータリ難民キャンプを訪問しました。急遽行くことになったため、シリア人難民についての知識を持たずに行きました。東京でのほほんと生きてきた私にとって、目の前に真っ白なテントがどこまでも続く光景は、忘れられないものでした。それは日本に戻っても薄れることはなく、もう一度ヨルダンへ行き、じっくり話を聞いてみたいと思うようになったのです。そこで、2014 年春、再び訪問することにしました。

今回の訪問は 2 回目ということもあり、以前よりも考えさせられることはたくさんあったのですが、その中でもこれだけは伝えたいということがあります。

ニュースはどうしても、大きな出来事しか伝えません。それは仕方がないことであると思います。しかし、世の中で簡単に手に入る情報だけをそのまま信じてはいけないと、今回の訪問で感じました。というのも、もともと私は「難民＝キャンプで生活している人」と考えているのです。また、キャンプは前回の訪問でシリア難民に出会った場所でもあったためザータリ難民キャンプの訪問を中心に予定を立てていました。しかし、現地で取材等の手配をしている方に、都市部に住んでいる難民も訪問した方が良く勧められました。そこで今回、サダーカさんと会うこととなりました。

ザータリ難民キャンプは、水や食料、衣服はある程度需要が満たされていました。現在抱える問題は衛生問題と言われ、緊急で命が脅かされるような状況から脱した印象を受けました。一方で、家庭訪問をした都市部で生活しているシリア人難民の状況はザータリ難民キャンプの人々とは全く違っていました。家は、雨風をしのぐことはできていましたが、寒くて体の芯が冷え、空気が籠っていて風邪は蔓延しやすい環境で、家族はみなやせ細っていて、とても毎日生活を送れるような場所ではないと思いました。難民キャンプよりもプライバシーは守られていますが、それ以外は私が見た範囲では難民キャンプよりも悲惨な状況に感じました。

日本でも特集が組まれていましたが、難民キャンプにはよく取材が来ます。画としてもいいでしょうし、その方が視聴率も取れるのかもしれませんが、この方法だからこそ新たにシリア人難民の状況を知る人も出てくるため、そういった報道を批判するつもりはありません。また、都市部ではどこにシリア人難民がいるか分からないため取材に入りにくいという問題も絡んでいると思います。しかし、現実として、難民キャンプにいるのはヨルダンにいるシリア人難民の 2 割にしか当たらないのです。残る多くのシリア人難民はキャンプの外の都市部で生活しています。

私たちは報道では取り上げにくいことを学生という自由な立場から伝えたいと思ってヨルダンに足を運びました。それにも関わらず、もしかしたら都市部のシリア難民の状況を見ずに日本の学生に現状を伝えていたのかと思うと怖くなりました。もちろん、難民キャンプにはもう支援が必要ない訳ではありません。そもそも生活水準



だけで支援の必要性を考えるべきではありません。私は『簡単には見えない部分にも注目しなければならない』と思います。

紛争が始まって3年という月日が経ち、どこか“シリアの紛争”は日常的になって聞き慣れてしまい、意識的に目を向けにくくなった部分があるように感じます。だからこそ、今一度改めるべきだと思います。自分の人生を振り返ってみると、誰かから言われた辛い一言はずっと残っているし、身近な人の死は忘れることはありません。辛い経験であればあるほど、いつまでも心に消えない傷として残ります。何百万と言われるシリア人難民も、一人一人の人です。戦争の始まる前の家族との生活、友達との思い出、好きな人との思い出も、戦争が始まってから兵士に言われた一言、銃声、大切な人の死も、今もこれからもずっと残っていく記憶なのではないでしょうか。

今回、シリア人難民の一人一人の経験を聞けば聞くほどに、私の中でそれは他人事にはできなくなりました。同じ空気を吸いながら同じ匂いや暖かさや冷たさを感じ、目と目で会話をし、相手に触れれば温かくて、肌の色や顔立ちは違うけれど、何も変わらない同じ人です。

私は今回、シリア人難民とは会うことが出来ましたが、他の国の難民や日本で報道される事件・天災などを経験した人と出会ったことはありません。しかし、何か報道があれば、他の視点からの報道や現地で活動する人の言葉にも注目するようになりました。また、そこにいる人のことを、その人の視点から想像するようにもなりました。どんな出来事でもそこには自分と同じ人がいると思えば、自身の毎日の生活の中でも実感を持つことができ、そうすれば皆が助け合えるようになり、いつしか争いをなくすことに繋がるのではないのでしょうか。これが今すぐに一人でも始められる国際協力だと思います。

## (5) 複雑な問題への解決方法

今野 貴之 (明星大学 教育学部)

### 【1. ヨルダンと日本の状況は同じ?】

2014年3月、3年ぶりに中東の地へ行きました。渡航先はシリアではなくヨルダンです。空港からダウンタウンに向かう途中には外資系のショッピングセンターが建設され、市内に近づくにつれて活気立つ光景を目の当たりにし、本当にシリア難民がこの国におり、大変な状況で暮らしているかと疑問を持つ様子でした。しかし、その華やかな一面とは裏腹に、シリア難民支援をおこなっているサダーカを始めとした組織・機関がこれまで報告しているようなシリア難民の生活の現実が、そこにはありました。

このような状況は、ヨルダンにおけるシリア難民に限ったことではないのかもしれませんが。例を挙げるとすれば、日本でも同じことが起きているのではないのでしょうか。

東日本大震災によって東北地方が甚大なる被害を受けました。しかし、最近はその状況がマスメディアで報道されることは少なくなってきました。また、現地へ赴くボランティアの数も減っているのです。東京や名古屋、大阪などの都市部に住んでいるだけでは東北地方の様子はほとんど分からない状況になっています。もしかしたら日本へ観光で訪れる外国人は、震災の影響について分からないかも知れません。

しかし、実際は、震災により被害を受けた東北地方の人たちは過酷な生活を強いられている現実があります。この状況は、ヨルダンも同じではないのでしょうか? ヨルダンにシリア難民が暮らしていますが、その状況は「ヨルダンに観光に行っただけでは分からない」のです。



## 【2. 現地に行かなければ「現実」は見えない】

今回の渡航でわかったことがあります。それは、シリア難民がアンマン市内に住みはじめていることに対して、気にしていない人々がヨルダンにもいることです。それらの人々は、自分たちの生活にシリア難民は関わらないから、関係がないと考えているようなのです。東日本大震災の事例と同じように、自分たちの生活からは遠く、関係がない、と考えている人が少なからずいる状況と同じではないでしょうか。

ところが、日本で震災ボランティアにいった方々が口を揃えていうことが2つあります。ひとつは「現地に行ってみて、東北地方が「復興」にはほど遠い状況である」ということ、もうひとつは「自分の意識の低さ」です。これらの気づきは、実際に現地に行くことで改めて分かる「現実」なのです。

私も今回の渡航で「現実」を知りました。私はシリアやヨルダンなどの中東情勢を日本で集め、現地の様子を知っているつもりでした。しかし、シリア難民の直接の「声」という「現実」には、それまで集めた情報とは比較にならないくらい重みがありました。新聞やテレビ、各メディアが発信している「文字」ではなく、現実の「声」がそこにはあるのです。

## 【3. 複雑な問題への解決方法】

シリア難民を取り巻く状況はじつに複雑です。「これさえすれば問題は解決するよ!」というような処方箋的な解決方法はないのです。医療、社会福祉、教育、行政などすべての分野が同時並行的に関わらなければシリア難民の問題は解決しないと考えます。複雑な問題への解決方法は、複雑になるということです。

では「自分は何ができるのか」ということを考えるようになりました。シリア難民の「声」を聞き、自分も何かしなくてはと思い立った際に何が出来るでしょうか？自分ができることはとても限られています。いきなり現地に行っても何もできませんでした。

そうは言っても、自分の心の中で何かを決心するだけでは、何も変わりません。何かを変えるためには「行動」に移す必要があります。自分が今すぐに見える、小さな行動です。たとえば募金、署名、フォーラムへの参加、周りの人への呼びかけなど、ほんの些細な「行動」です。それらの小さな行動は、シリア難民を取り巻く現状への、様々な分野からの解決のアプローチになると思います。

これらのアプローチは、一見、まとまっていないように捉えられるかもしれませんが、しかし、シリア難民という複雑な問題が絡み合う現状へ対処するためには、このような様々なアプローチが必要であると考えます。



## 2. アハバールフロムニッポン <日本での活動の報告>

### (1) サダーカ「アースデイ 2014」参加報告

サダーカボランティア：藤井 沙織

**日時**：2014年 19日(土) 20日(日) 10時～17時(両日)

**会場**：代々木公園イベント広場

株式会社アレppoの石嶺さまのブースにて、石嶺販売の手伝い、葉書販売、チラシ配り、写真展示スペースでシリア難民についての説明等を行いました。想像以上に多くの方がいらして、じっくりと私たちの話に耳を傾けてくださいました。ブースを訪れてくださった多くの方から「アレppoは今どうなっているのか」という質問を受けました。(石嶺工場は生産再開したが、輸送時にトラックが襲われ身代金を要求されたり、電気が不足していたり、様々なことがまだまだ難しいそうです(2014年4月当時)。混乱が始まる数ヶ月前シリアに訪れたご夫婦が目を細めて写真を眺め、「とっても『人』が素敵な国でね、この子も連れて行きたかったんだよ」と、8ヶ月になるお嬢さんを抱きながら話してくださったのが印象に残っています。ブースの他に、トークショーも行いましたが、立ち見が出る程の盛況でした。

2日間という短い時間・小さなスペースですが、「シリアに関心を持っていなかった」という方々にもお話を聞いていただき、意義あるアースデイとなりました。



<b>アースデイチャリティー金 総額 240,805 円</b>	
内訳	
<b>収入</b>	
石嶺売上	221,050 円 (場所代 1 割を引いた 199,050 円が寄付金)
募金箱	51,750 円 (アレppoの石嶺社長さまから 50,000 円)
葉書売上	2,750 円 (25 枚分)
	<b>計 253,550 円</b>
<b>支払</b>	
郵送代、コピー・写真準備代等	<b>計 12,745 円</b>

### (2) メディア掲載のお知らせ

サダーカ広報ボランティアの井上の寄稿が、アカデミック電子ジャーナル SYNODOS にて掲載されました。ヨルダンでのシリア難民家庭訪問を通じて、シリア人難民の現状を報告しています。下記リンクより、ご一読ください。

▼悪化するシリア情勢に難民たちはいま(2014年7月7日掲載)

<http://synodos.jp/international/9370>



**(3)8, 9月のイベントのお知らせ**

8月1日～31日「みんなで作るシリア展」@新宿ルミネエストB1のBERGさん（協力）

<https://www.facebook.com/shiriaten/timeline>

9月21日（日）ピースディ@関西テレビ「なんでもアリ～ナ」にてブース出展予定

<http://peace-japan.net/news/79>

9月15日（月祝）～21日（日）アラビックフェスタに参加@京都市国際交流会館 展示室

<http://www.kcif.or.jp/>

☆☆

このメールマガジンは、勝手ながらこれまでシリア支援の関係でお会いした方々、ご支援を頂いている方々へお送りしております。今後の配信を希望されない方は、お手数ですが、以下までご一報を頂きますよう、お願い申し上げます。配信停止はこちらまで：[info@sadaqasyria.jp](mailto:info@sadaqasyria.jp)  
なお、このメールの配信元の[akhbar@sadaqasyria.jp](mailto:akhbar@sadaqasyria.jp)は配信専用ですのでこのメールへの返信はできません。

☆☆